

横井小楠 —その業績と生涯—



今年、わたしたちの住む熊本に生まれた横井小楠の生誕200年にあたります。小楠は、幕末(江戸時代の末期)に日本の進む道を示した偉大な思想家の一人です。交流があった勝海舟※は、小楠を次のように言っています。「おれは今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲(隆盛)とだ。横井は西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやった位だが、その思想の高調子な事は、おれなどはとても梯子を掛けても及ばぬと思った」(『氷川清話』より)

海舟にそのように言われた、横井小楠はどんな人物だったのでしょうか。

1 小楠誕生

横井小楠は、文化6年(1809)8月13日、家禄※150石の肥後藩士であった横井大平時直の二男として熊本城下内坪井で生まれました。母、兄、弟の5人家族でした。本名は時存ですが、ふだんは平四郎と呼ばれていました。

横井家の先祖は鎌倉幕府の執権(将軍の補佐)北条氏と言われています。小楠の肖像画の袴には横井家の「丸に三ツ鱗」の紋が付いていますが、これは北条氏の家紋と同じです。

小楠が生まれた内坪井(現在の内坪井町)は、熊本城の北東の方角にあります。今は、その東側を坪井川が流れていますが、その当時は、かぎ形をした濠(現在は坪井川)が所々にあって、川(もとの坪井川)が西側を蛇行している、中級家臣の多く住む武家屋敷でした。生家は町の中心部(現在の熊本中央高校付近)にありました。

ところで、小楠は畏斎・小楠・沼山という3つの号(本名以外の名)を持っています。最も知られている号「小楠」は、南北朝時代に後醍醐天皇に仕えて足利尊氏と戦った楠木正成の子ども正行(小楠公)を慕って付けられたと言われています。

さて、当時の政治情勢はどうだったでしょうか。将軍は第11代徳川家斉、肥後藩主は第10代細川斉茲でした。江戸幕府も200年を経過して、幕府の統制力も弱くなり、肥後藩も財政的に厳しい状況

でした。一方、日本近海にはロシア船やイギリス船がひんばんに出没するようになり、外国との関係も問題になる時期でもありました。

※勝海舟(1823~99)...

幕臣(旗本)。1860年、咸臨丸を指揮して日本人初の太平洋横断に成功。また1868年には西郷隆盛と会見して江戸城無血開城を実現。

※家禄...

家に代々伝わる年俵(給料)。石高で表わした。



▲横井小楠肖像画



▲小楠生誕地(熊本中央高校正門)

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



江戸時代、武士の子どもは、^{ぶ げい けんじゆつ}武芸(剣術など)や^{じゆがく れいぎ}儒学、礼儀など文武両道を身につけなければなりません。肥後藩士の子として生まれた小楠は、それらを藩の学校「時習館」で学びました。時習館での小楠の学習の様子や成果はどうだったのでしょうか。



▲時習館跡(熊本城二の丸)

2 時習館に学ぶ

小楠は8歳の時、藩校時習館に入学します。時習館は、第8代藩主※細川重賢がつくった肥後藩の学校で、宝暦5年(1755)の正月に開校しました。時習館には、①学問所と武道所があり、文武両道を学ぶことができます。②藩士の子もだけでなく、農民や町人の子どもでも優れた者は入学できる。③試験制度があり、合格すると上級の学科で学ぶことができます。④成績優秀者は藩の費用で寮に入って勉強ができる、などの特色がありました。

熊本城二の丸にあった時習館の敷地は南北に長く、正門のある南側に武道所「東榭・西榭」があり、中央から北側にかけて学問所がありました。初等科に入学した小楠は、中央にあった「習書齋」で習字を習い、「句読齋」で素読(音読)を学びました。中等科に上がると「蒙養齋」で、グループによる※儒学の古典の読み合わせをしたり、先生の講義を受けたりしました。このほか、礼儀作法や数学、音楽などの学科もありました。14歳のころ、水道丁(現在の安政町)に引っ越した後も勉強に励み、15歳の時には、藩から「句読・習書」や詩作の成績が優秀」ということで褒美をいただいています。このころから、小楠は希望する武芸師範に入門し、武道所で武術の鍛錬を行うようになりました。

また、時習館では試験に合格すると、一番北にある講堂「尊明閣」で高等の学問を学ぶことができ、小楠も試験に合格しました。21歳の時には、第12代藩主斉護から「学問数年よく進み、居合も上達

し、^{そうじゆつ ゆう}槍術・^ぼ游(水泳)も心がけがよい」と褒められています。

講堂生の中で成績優秀な者は、^{ききょうせい}居寮生に選ばれ、敷地の東側にある寄宿舎「^{せいげん}莠菰齋」に入ることができます。小楠は25歳になった天保4年(1833)に居寮生に昇進し、同7年には居寮生世話役に任じられました。また、藩主より紋付上下(袴)一具も与えられています。さらに、同8年(1837)2月、その中で最も優秀な者が就任する居寮長に^{ぼつぎ}抜擢され、米10俵が支給されました。小楠29歳の時のことです。

※細川重賢(1720~85)...

第8代(肥後藩では第6代)藩主で明君といわれた。^{めいくん}堀平太左衛門を登用して財政などの再建に取り組み、「宝暦の改革」を行った。

※儒学...

古代中国の孔子の教え(仁や礼)をもとにした学問。



▲時習館(南西側から見る)
「熊本城復元模型」天守閣展示より



▲小楠旧居跡(安政町)

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



とくがわい えやす ばくふ
1603年に徳川家康が幕府(将軍が政治を行う役所)をつくって以来、江戸は日本の政治の中心地となりました。約260年間続いた江戸時代には、幕府や各藩から選ばれた有能な青年たちは江戸に集まり、学問に励みました。小楠も肥後藩の推せんにより江戸に留学しましたが、どんな人たちと出会ったのでしょうか。



▲小楠が通った熊本～江戸(豊後路)のコース

3 江戸留学

小楠に肥後藩より江戸留学を命じるとの報せが届いたのは、天保10年(1839)3月、31歳の時です。当時、藩では自由に留学することは許されず、藩命を受けて留学できることはたいへん名誉なことでした。小楠はさっそく旅装を整え、3月末に江戸へ旅立ちます。熊本城下を出発した小楠は、大津・阿蘇を経て豊後路(現在の大分県)を通り、鶴崎(肥後藩領・現在の大分市)に着きました。鶴崎では、当時郡代*であった兄の時明と久しぶりに会い、語り合ったといひます。鶴崎港からは船で瀬戸内海を渡って大坂・京都に行き、東海道を通って、4月中旬に江戸に着きました。

さて、小楠の江戸留学の目的は、天下の大学者を訪ねて講話を聴き、諸藩から江戸に来ている優れた人たちと知り合って、意見を交わすことでした。5月に入ると、大学者の訪問を始めますが、江戸で特に優れている人物として、松崎慊堂や藤田東湖を挙げています。

松崎慊堂は肥後国出身(現在の御船町生まれ)の儒学者です。当時69歳の慊堂について小楠は「学問が広くて深く、知識が豊富です。性質も穏やかな人です」と言い、江戸に居る学者では慊堂が最高と評しています。

藤田東湖は、徳川御三家である水戸家の藩士です。藩主徳川斉昭のそばに仕えて藩政改



▲松崎慊堂(御船町提供)

革などに力を尽くし、その思想は尊王攘夷派*に影響を与えた人です。小楠は東湖のことを「話しぶりがさわやかで、優れた意見を持ち、理論より事実を大事にしている。東湖のような人物は他にいない」と激賞していて、たびたび訪問しては語り合い、気心の合う間柄であったようです。

12月25日、水戸に帰る東湖は忘年会を催し、小楠はじめ諸友を招きました。小楠はその席上で、「今夜は国を憂える同志の集まりであるから、率直に政治論をたたかわせよう」と言い、酒を飲みながら論じ合いました。ところが、翌11年2月9日、突然、肥後藩江戸留守居役*から小楠に帰国の命令が下りました。その理由は、先の忘年会の帰りにさらに酒を飲み重ね、藩外の者とトラブルを起こしたからだといひます。酒による過失が原因で志半ばに江戸を去ることとなったのです。

*郡代…郡を治める藩の役人

*尊王攘夷派…天皇を尊び、外国を排除する考えをもつ人々

*江戸留守居役…幕府と大名諸家などの連絡や交渉、情報収集に当たる藩の役人



▲藤田東湖
(茨城県大洗町提供)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。



横井小楠 —その業績と生涯—

武士の家庭では、家の跡継ぎになる総領息子(主に長男)は大事にされましたが、二男、三男は「厄介者」(世話のかかる人)とが「部屋住み」と呼ばれていました。江戸留学を1年足らずで帰国させられた小楠は、兄の厄介者になり、貧しい暮らしをしなければなりません。そういう暮らしの中で、小楠はどのような学問を志したのでしょうか。

横井家(家系図)



4 小楠の苦学修養

横井家では、小楠が時習館で学んでいた23歳の時、父がなくなり、2歳上の兄が跡を継いでいました。

江戸から帰国した小楠は、肥後藩から70日間の逼塞(昼間は外出禁止)の罰を受け、兄の世話になりながら、水道丁(現在の安政町)の自宅で過ごさねばなりません。

しかも、当時の肥後藩は大変な財政難で、各藩士の俸給は減らされ、家禄150石の横井家も実収入が減り、家計は赤字続きでした。そのころの小楠の生活ぶりは次の様だったといわれています。「兄の家の6畳の間で謹慎しましたが、その部屋の畳は破れ、壁はボロボロにぐずれ、雨戸がないのでわらむしろを軒からつり下げて雨風を防ぎ、縁側は青竹を束ねてありました。下男は1人いましたが、手不足なので、平四郎(小楠)は時には飯炊き、水汲みなども手伝いました。」(徳富蘆花※著『竹崎順子』より)

小楠はそういう状況のなかで、江戸留学中の酒による失敗を反省すると共に、これまでの学問を整理し、自らの実践に重点をおく朱子学の研究に没頭しました。

朱子学は、中国の宋の時代に朱子※によってあらたにまとめられた儒学の一派です。朱子学では、君と臣・父と子などの上下関係についてそれぞれの身分を守るべきだとする名分や社会での順序や決まりがきちんと整う秩序を強調し、礼儀作法を重んじました。これらは幕府や諸藩の受け入れるところとなり、朱子学は盛んにな

りました。

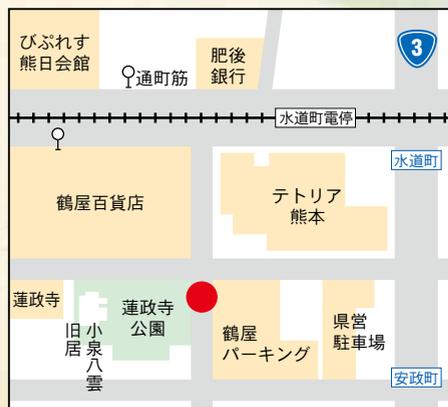
ところで、肥後藩はどうだったのでしょうか。藩校「時習館」の学風は、初代教授(学長)秋山玉山(1755年就任)の時は折衷学(色々な学派の長所をとって用いる学問)でした。しかし、2代目教授藪孤山(1766年就任)の時から朱子学に変わり、小楠が学んだ幕末のころも朱子学が中心でした。

※徳富蘆花(1868～1927)…

徳富一敬(横井小楠門人)の二男、本名健次郎。小説家。代表作『不如帰』。

※朱子(1130～1200)…

中国南宋の儒学者。朱子は尊称。



▲水道丁旧居跡



このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



幕末の肥後藩には、3つの党派(主義主張を同じくする士族のグループ)がありました。時代にあった道徳的な政治の実現をめざす実学党、これまで守ってきた藩政を続けることに努める学校党、のちに尊王攘夷(天皇を尊び、外国との交流をこぼむ)を主張する勤王党の3つです。実学党を結成したのは横井小楠と同志たちでしたが、同志たちはどのような人たちで、実学とはどのようなものだったのでしょうか、また、党派間で、どのような問題が起こったのでしょうか。

5 実学の起こり

横井小楠とその同志は天保12年(1841)ごろから、自らの実践に重きを置く朱子学の研究会を始めました。メンバーは時習館時代からの友人で、家老※長岡監物(米田是容 家禄1万5千石)・下津休也(1千石)・元田永孚(550石)・荻昌國(250石)そして小楠(150石)の5人です。研究会のテキストには朱子学の内容のあらましを説明した入門書『近思録』を使いました。皆で読み合わせをしたり、既に朱子学を学んでいた長岡の講義を聞いたり、質疑討論を活発に行いました。議論が行き詰まった時には小楠がその解決のきっかけを出すこともありました。

研究会では会を重ねるごとに政治のあり方に眼を向けるようになり、道徳と政治を結びつけた「堯・舜・孔子※の道」、すなわち、中国古代の聖天子が行った徳政のような理想政治の実現をめざしました。これを真の実学とし、「実践すること」を重視しました。家老長岡家の屋敷など会場にした研究会の回数はだんだん増え、参加者も多くなりました。

当時の肥後藩は、深刻な財政難が続いている状況でした。そこで小楠は、財政改革論「時務策」※を立案して、藩政改革を求めました。また、時習館での教育についても実践を重視すべきで、字句の解釈や暗誦を主とする学風を改めるよう、藩に申し入れました。そして、これらの提言を次席家老の長岡監物を通して藩政に浸透させよう

としました。

これに対して、時習館(藩の学校)や藩政の現状を守ろうとする藩の主流「学校党」は、トップに筆頭家老の松井章之(家禄3万石)をすえ、長岡・小楠ら「実学党」の意見を取り入れようとしませんでした。こうして2つの党派は対立し、ついには、松井対長岡という家老同士の間での対立となりました。しかし、家老の役目は藩政の全体をまとめることです。長岡監物は藩政の混乱を避けるために、自ら家老職を辞職しました。このことがあって、監物宅での朱子学研究会は中止となりましたが、一方で、小楠の塾がスタートしました。

※家老…家臣の中で最高の地位にいる人。細川藩には松井・米田・有吉の世襲(子孫が家老を受け継ぐ)家老三家と一代家老が数人いた。米田家は家老に就任すると長岡監物を名乗る。

※堯・舜…いずれも古代中国の伝説上の聖天子(徳の高い帝王)。

※孔子(前551～前479)…

中国春秋時代の思想家、徳による政治を強調。儒学の祖。

※時務策…

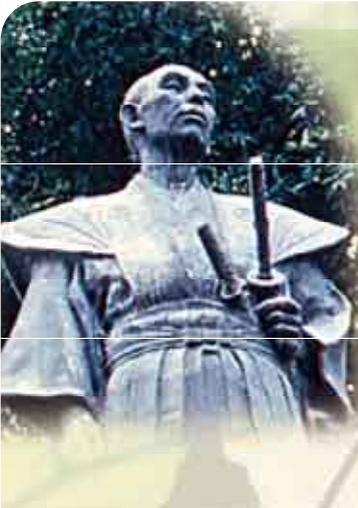
上・下の身分の者がともに節約をする。貨殖(藩がお金を出し、財を増やすこと)をやめる。町方制度を整える。



▲米田是容の下屋敷(現必由館高校敷地)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



幕末になると各地で、有名な学者や教育者が開いた「私塾」^{しじゆく}が急に増えました。兄の家に居候の身であった横井小楠も『小楠堂』^{いそらう}や『四時軒』^{しじょう}という塾を開きます。「銀杏城下の寒士(貧乏な男)の家に、生命の灯が燃えはじめた」と語られる小楠の塾で、小楠は塾生にどのようなことを学ばせたのでしょうか。



◀現在は駐車場になっている小楠堂跡(下通1丁目)

6 私塾「小楠堂」を開く

天保14年(1843)、小楠は雨戸はなく壁もぼろぼろの水道丁の自宅の一室(6畳の間)で私塾を開きました。小楠の塾は、初めて学問をする人のための塾ではなく、現在の大学のようなものでした。最初^{とくとみいっけい}の入門者は徳富一敬^{なおかた}や矢島直方^{ごうし}など地方の郷士^{ごうし}の子で、後には肥後藩士や他藩の藩士も入門するようになり、塾生は次々に増え、6畳の間では狭^{せま}くなってきました。

弘化3年(1846)、藩の役所に勤めていた小楠の兄時明^{ときあき}が昇進^{しょうしん}し、横井家は相撲丁(現在の下通1丁目)に転居^{すもうちよう}しました。新居での小楠の塾は2倍の広さになり、翌年には、敷地内に塾を新築して『小楠堂』と名付け、20余名^{よめい}の塾生^{きしゆく}が寄宿^{きじゆう}しました。『小楠堂』には小楠直筆^{じきひつ}の掟^{おきて}(きまり)^{かか}が掲げ^{かか}られましたが、酒失^{しゆしつ}に対する自戒^{じかい}(自分への注意)でしょうか、最後に「酒禁制(酒の禁止)の事」も加えられています。

さて、小楠は「学問」について「自分の心を日々活用すること(心の修行)」^{しゆぎよう}と言っています。そして、「古人(昔のすぐれた人)は、書物に頼ることなく、自分に具わっている能力を十分発揮して、毎日の生活の物事に心を配^{くば}り、工夫した。例えば、親子兄弟はもちろん、多くの人と交わり、農民などとも親しく語り合ったりした。また、自然や動植物についても実際の場で理解することに努めた。その後、見聞きした事を確かめるために、関係の書物を読み、自分の実際の経

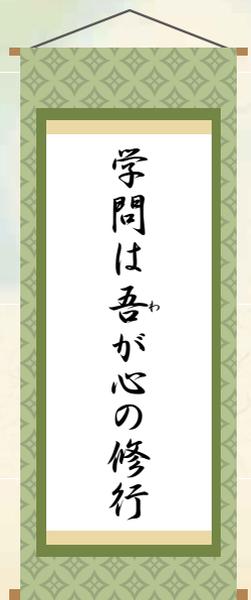
験や物事の仕組みなどに限りがないことに気付き、さらに勉学に励んだ。これが真の学問である。」と解説しています。

小楠は塾生に対して、「書物の上だけで物事を理解するのではなく、古人の学んだやり方を学ぶ真の学問をするように」と、励ましました。小楠の塾生に対する教育的態度は厳格^{げんかく}でしたが、一方では、身分・年齢にかかわらずなく、塾生一人ひとりの才能を大事にしたので、『小楠堂』の評判は高まりました。

※四時軒…安政2年(1855)に沼山津(熊本市)につくられた

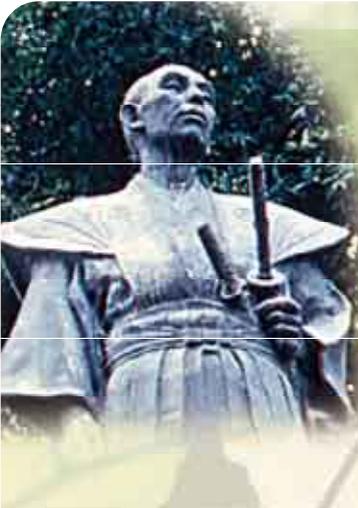
※郷士…農村に昔から住んでいる武士や、農民で武士の待遇を受けている者

小楠堂の掟
・ 礼儀を正せ
・ 師範の指導に
・ 背くな
・ 禁酒せよ



このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



私塾「小楠堂」には、小楠の学風^{した}を慕ってさまざまな人たちが入門しました。小楠はこの塾で塾生たちにどのように接し、教え導いたのでしょうか。塾生たちとの人間関係はどうだったのでしょうか。

7 小楠の指導と塾生たち

小楠の講義(授業)の特色は、聖人^{せいじん}※の行いや教えを常に現在の状態と比べ合わせ、実際の場で活用することを基本にすえたものでした。そこで、経伝^{けいでん}※だけでなく世の中の出来事に関して討論させ、その議題には、塾生が盆や正月に里帰りした時に見聞したもの(作物の出来具合や人々の生活ぶりなど)も取り入れていました。また、講義では特に大切なところでは、「繰り返し繰り返し、ご指導があり、理解できた」と言います。

小楠は、厳しい反面、たいそう親しみ深い所がありました。例えば、塾生たちとよく趣味の碁を打ちましたが、「待った待った」と手を取り合わんばかりに争うこともあり、また、剣術でも、まるで同僚のように互いに遠慮会釈なしに猛烈にたたき合うという調子でした。小楠の娘みやは「塾生の方々と父との親しみは普通の先生と弟子の関係ではなく、皆一 가족 のようで、塾生たちの家庭とも親しく交わっていました」と言っています。このように、小楠と塾生たちの絆^{きずな}はかたく、塾生は自分の信じる道を堂々と大手を振って進み、周囲の圧力が強ければ強いほど、一致協力^{いっし}し、師である小楠のために献身的に尽くしました。

小楠塾の塾生には優れた人物が多く、多士^{たし}済々^{せいせい}※でしたが、実学党と学校党との対立の中で、父の許しを得られず、母の助けを借りて、



▲横井小楠と維新群像

ひそかに通塾した肥後藩士もいました。一方、他藩からの塾生も多く、特に目立つのは柳河藩と越前藩でした。柳河では、「肥後学」と言えば、小楠の「実学」を指したといい、小楠はのちに越前藩士との交流も行っています。

平成12年4月、熊本城が間近に見える高橋公園に「横井小楠と維新群像」が建てられました。小楠を中央にして5人が並ぶブロンズ像で、台座には小楠高弟6人が配置されています。

※聖人…知識や徳にすぐれ、世の模範と仰がれるような人。

※経伝…儒教の経典(中国古代の聖人の教えを述べた書物)とその解釈書。

※多士済々…すぐれた人が多くいる様子。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は吉田松陰^{しょういん}*と熊本で親しく交際しています。松陰は一体どういう人だったのでしょうか。小楠と松陰の共通点は何だったのでしょうか。また、二人を結びつけたのは誰だったのでしょうか。

8 吉田松陰、小楠堂訪問

嘉永6年(1853)10月、吉田松陰は、長崎港に停泊中のロシアの軍艦に搭乗するため、長崎に向かいますが、その途中、熊本の小楠堂に立ち寄り、3日間、小楠と親しく話し合っています。松陰24歳、小楠45歳の時です。

小楠は、親交を結んでいた宮部鼎蔵^{ていぞう}*から、松陰は萩藩(現山口県)の藩士で、至誠(真心)をもって物事にあたり、また、実学を重んじて全体を理解する人だと聞いていて、諸国巡遊^{しゅんこくじゆんゆう}(嘉永4年に約半年間、小楠は日本国内21藩を巡り、財政の様子などを調べ、有名人と会見している)の際に萩を訪れましたが、松陰と面会することができませんでした。そこで、今度の松陰との出会いを大変喜び、ある1日は終日対話をしています。松陰は、その後、長崎に行きますが、軍艦はすでに退去したあとで、海外への渡航は果たせませんでした。

帰国後、小楠宛に出した手紙の中で、松陰は「小楠先生に萩に来ていただいて、藩士たちに天下の情勢とその対処については是非ご指導願います」と述べています。実現はしませんでした。松陰が小楠の学問や考え方を深く理解し、政治的実践へ大きな期待をしていたことがわかります。

安政元年(1854)正月、ペリー^{ひき}*がアメリカの軍艦を率いて再び来日した時、松陰は、再度海外渡航を計画、下田(現静岡県)でアメリカ



▲吉田松陰(山口県文書館提供)



▲宮部鼎蔵(御船町提供)

の艦船に乗ろうとして失敗し自首します。そのため萩藩の牢屋に入れられ、後に実家に幽閉(閉じ込められる)されましたが、同4年(1857)に「松下村塾」^{しょうか せんじゆく}*を開き、高杉晋作^{たかすぎ すすむ}*や伊藤博文^{いとう ひろふみ}*など多くの人々を育てました。しかし、同5年(1858)、老中(幕府の最高職)襲撃を計画した疑いで再び牢屋に入れられ、同6年(1859)、江戸に送られます。松陰は、取調べ中にも幕府の政策を批判したため、処刑されました。30歳の若さでした。

※吉田松陰(1830~1859) … 萩藩の教育者、山鹿流兵学師範(山鹿素行が考え出した戦の勝ち方を教える先生)。

※宮部鼎蔵(1820~1864) … 肥後藩の山鹿流兵学師範、尊王攘夷者で肥後勤王党のリーダー・上益城郡御船町出身。

※ペリー(1794~1858) … 米国東インド艦隊長官・日本に2度来航。

※松下村塾 … 萩にあった私塾・松陰が叔父の後を継いで塾長となる。

※高杉晋作(1839~1867) … 萩藩士・尊王攘夷者、奇兵隊を創設。

※伊藤博文(1841~1909) … 萩藩出身・政治家・初代総理大臣。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠の2歳上の兄・時明^{ときあき}が、安政元年(1854)7月、病死しました。享年48歳の若さでした。小楠は、その前年2月、肥後藩士小川吉十郎の娘・ひさと結婚するなど、祝い事がありましたが、人一倍慕^{した}っていた兄の死に悲嘆に暮れました。兄はかねてから病弱であつたらしく、度々職を辞しています。小楠の、兄への看病ぶりは至れり尽くせりで、門弟^{もんてい}たちを感動させたといいますが、一時は病状の回復した兄も、ついに帰らぬ人となつたのです。

9 小楠の家督相続と絶交

横井家では時明の死去にともない、跡継ぎが問題になりました。時明には長男・左平太^{さへいた}(10歳)がいましたが、幼少でしたので跡継ぎをすることができません。そこで小楠が兄の養子となつて、横井家を継ぐことになりました。

ところで、当時の肥後藩では家禄を代々受け継ぐ世襲^{せしゅう}に制限を定め、知行取^{ちぎょうとり}※は旧知^{きゅうち}と新知^{しんち}とに分けられていました。

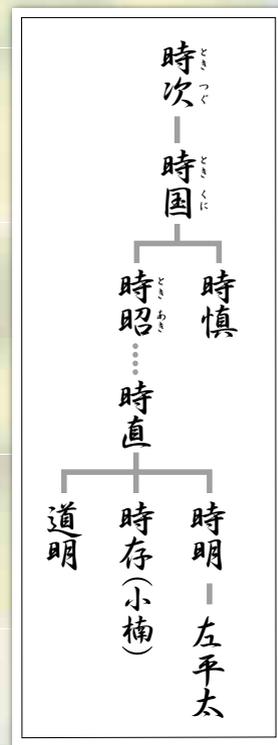
この制度は、第8代藩主細川重賢^{しげかた}の時にできたもので、家禄を相続する場合、第4代藩主光尚^{みつなお}まで(1649年)の家臣は旧知としてすべての相続を認めるが、それ以後に家臣になった者は新知とし、親(小楠の場合は兄)の手柄と跡継ぎをする者の才能が特に優れていないと家禄を減らすというものです。小楠の家系は新知でした。

小楠は文武両道にたけていましたが、肥後藩政の改革などを求めた実学党のリーダーということで、家禄が減られる心配もありました。幸いそのまま相続でき、小楠はさっそく肥後藩士として番方(軍事訓練や藩主の守衛^{しゅゑい}など)に任じられました。

さてこのころ、小楠は米田是谷^{こめだ これた}と絶交しています。小楠と4歳年下の米田が親しくなつたのは藩校時習館で学んでいたころです。米田

肥後横井家略系図▶

細川忠利^{ただとし}(近世細川氏※第3代)が、寛永9年(1632)、肥後国54万石領主として熊本城に入城した際、細川氏の家臣であつた横井時次も肥後に入国し、肥後横井家の祖となりました。宝永4年(1707)、2代目時国の子時昭のとき分家し、家禄150石を賜りました。この時昭が横井小楠家の祖です。



は1万5千石の国家老であつたのに対し、小楠の横井家はわずか150石で、地位と境遇に大変差がありました。しかし、二人は、お互いの学問の深さと優れた考え方を尊重し合い、20年以上親しい交際が続いていました。ところが、学問の目標についての解釈の違いなどが原因で絶交し、実学党も米田派と横井派に分かれてしまいました。

※知行取 … 江戸時代、領主から一定の土地(知行地)を分け与えられた上級・中級家臣。横井小楠家も中級家臣であつた。

※近世細川氏 … 戦国時代から江戸時代までの細川氏のこと。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は沼山津※に私塾四時軒を建てました。現在の横井小楠記念館です。「その昔、小楠が眺めた山と川そして空と雲、それらを通して、小楠とその家族及び門下生たちの魂がこの新しい四時軒で再会しているような気分にひたります。」(来館者ノート「旅日記」より)



10 沼山津転居と開国論

小楠は安政2年(1855)5月、47歳の時に沼山津に転居しました。当時の沼山津は、竹林に囲まれた農家が点在するさびしい村でしたが、塾からの眺めは素晴らしく四季折々の風景を楽しむことができました。小楠が開いた塾を「四時軒」(四時=四季)と名付けたのも、うなずけます。

小楠の沼山津転居の理由として、①苦しい家計 ②米田是容との絶交 ③一時的な隠棲※などが挙げられますが、友人への手紙に「この数年、種々の病災で家計が甚だ苦しい」とあり、経済上の問題が主な理由のようです。このころの肥後藩の財政は大変苦しく、藩士の年俸(1年間の給与)の実収入は2割以下だったといえます。そのため藩では、出費の多い城下を離れて在(農村)に移りたい者に「在宅願」を発行し、許可制にしました。小楠もこの制度を利用したと思われる。

さて、熱心に攘夷論を唱えていた小楠でしたが、沼山津に転居後、「開国論」を主張するようになりました。嘉永6年(1853)、日本に通商(貿易)を求めて、アメリカやロシアの軍艦が来航した時、小楠は「夷慮応接大意※」をつくり、その中で「開国はすべての人が守るべき道である。そのためのわが国の方針は、公平で正しい道を守る国とは通商を許すが、侵略を目的とする国とは交流を拒絶するの二つしかない。すべて拒絶するのは世界の信頼を失う」と語っています。

その時の事態の変化に応じて物事を取りさばく小楠にとって、思想の移り変わりはむしろ当然のことでしたが、急に開国論に豹変した小楠から離れていく同志や友人も多くいました。しかし、小楠は周辺の評価には少しも執着しませんでした。

ところで、小楠は安政3年に矢島つせ子と再婚しています。3年前に結婚したひさが急に亡くなったためです。矢島家は益城郡杉堂(現在のの上益城郡益城町)在住の郷土で惣庄屋も務めた家柄でした。横井家に嫁いだつせ子は小楠のためによく尽くし、苦しい家計でしたが一家は円満でした。後に長男時雄と長女みやが生まれています。また、姉の順子※や久子※は小楠門下生の妻になっています。



▲妻 つせ子

※沼山津 … 江戸時代は沼山津村、のちに上益城郡秋津村となり、昭和29年に熊本市に合併。現在の熊本市沼山津。

※一時的な隠棲 … 将来自分を必要とする機会を待ち、俗世間を逃れて静かに住むこと。

※夷慮応接大意 … 外国人と応対する時の心がけ。

※順子 … 竹崎律次郎の妻、熊本女学校校長。

※久子 … 徳富一敬の妻、徳富蘇峰・蘆花の母。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



四時軒^{しじけん}*が建つ沼山津で50歳を迎えた小楠^{えちせんぼん}は、越前藩の招きにより、福井に行きます。これが小楠と越前藩との交流の始まりですが、交流が決まるまでに約1年もかかっています。交流は1858年から1863年までの6年間で4回行われました。この間、小楠は福井あるいは江戸に居て、越前藩主などを補佐し、越前藩や幕府の政治改革に力を尽くしています。



▲小楠が福井に滞在したことを記す石碑
(福井市にある小楠の寄留先跡)

11 越前交流の始まり

安政5年(1858)3月、小楠は、越前(福井)藩主松平慶永(のち春嶽)^{まつだいらよしなが しゆんがく}*に招かれました。福井に着くと、賓師^{ひんし}*として迎えられ、50人扶持^{ふち}(90石)の待遇を受けました。

さて、小楠と越前藩との関係は、9年前の嘉永2年(1849)10月、越前藩士三寺三作^{みつでらさんさく}が諸国巡遊の途中、熊本城下の小楠堂を訪れたことがきっかけです。三寺により小楠の名は福井に伝わりましたが、2年後の小楠の諸国巡遊でも小楠自ら20数日間福井に滞在して同地の有名な学者などと交わり、講演も行いました。その後、小楠は同藩の求めに応じて『学校問答書^{あらい}*』を著し、越前藩に贈っています。

ところで、当時の日本周辺には外国船がしきりに渡来していました。そのため日本海に面した越前藩では、特に海防(海岸の防備)^{かいぼう}の重要性と文武振興の必要から、これらを達成するための見識^{けんしき}*のある人材を求めています。

藩主の慶永は小楠とは直接会ってはいませんでした。本藩での小楠の評判や『学校問答書』などを読んで、小楠の優れた考えや学問の深さを知り、小楠を越前藩に招く決意をしました。そして、安政4年(1857)3月、家臣の村田氏壽^{うらひさ}を熊本に派遣し、小楠を招きたいという気持ちを伝えました。小楠は藩主直々の招きと越前藩の知り合いの懇請で越前行きを内話^{ないご}しました。そこで、同年8月、慶永は肥後藩主細川斉護^{さいご}*に手紙を贈り、小楠招聘^{しょうへい}*についてお願いしました。

ところが、肥後藩は断りの返事を出しました。その理由として、「小楠は、才気はあるようだが、実学などの流派をつくり藩校の学風を批判している。政治についての考え方にも不安がある。」などを挙げています。これに対し、慶永や重臣たちは諦めず、斉護らに幾度も要請した結果、やっと肥後藩の承諾^{しょうだく}を得ることができたのです。

福井での初仕事は藩校明道館での講義や来訪者への応対などでしたが、藩主には江戸滞在のため会えませんでした。

※四時軒…当時の四時軒(2月号掲載の写真)は撤去され、昭和57年に現在の横井小楠記念館の一部として復元された。

※松平慶永(1828~90)…幕末の越前藩主(32万石)。のちに春嶽を名乗る。世界的視野に立って開国論を唱え、政事総裁職として朝廷と幕府が協力し合うように努めた。

※賓師…越前藩の先生としての待遇を受けた。

※1人扶持…1日玄米5合(1年間1.8石)を給与された。

※『学校問答書』…問答書の中で、小楠は「学校の設立は、君主や一門などの学問研究の心がけが大切であり、学問と政事を一致させる大本が立てば興すべきだ」と言っている。

※見識…すぐれた判断力やしっかりした考え。

※細川斉護(1804~60)…第12代藩主。幕末の時期に当り、藩財政の極度の困難、外国船渡来による浦賀(現在の神奈川県)等警備の幕命、藩内での実学党と学校党の対立などがあって苦心した。なお、三女勇は松平慶永夫人。

※招聘…礼儀をつくして丁寧に招く。

このコーナーは、菅秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は、1回目の福井交流では越前藩の藩校で藩士の教育などに携わりましたが、弟が亡くなったという報せを受け、福井に来た年の12月に熊本に帰ります。帰国後、百余日を過ごした小楠は、安政6年(1859)再び越前藩から招きを受けました。

第2回目の交流では越前藩の貿易を指導し、また、第3回目には藩政がよくまとまるように助言し、『国是※三論』を書いています。

12 越前藩の貿易指導

第2回目の福井入りで、小楠が最も力を注いだ仕事は殖産※と貿易です。越前藩では、橋本左内が数年前から外国貿易を主張し、三岡八郎※は積極的富国論を強調していました。

三岡は、小楠帰国中、四時軒に2か月滞在して小楠の指導を受け、長崎に向かいます。そこで貿易に関する情報収集や越前蔵屋敷の建築を行い、オランダ商館との貿易契約を結びました。藩内にはこの事業に反対する者もいましたが、三岡は各村を巡回し、大庄屋や老農に物産繁殖の計画を熱心に説明して、物産総会所を設けます。藩からはお金の出し入れを検査・監督する役人を付けただけで、運営は商人の自治に任せられます。布・生糸※・茶などの物産を取り扱いましたが、生糸が最も高値で取引できると考え、農家の仕事として生糸をつくる養蚕※を特に奨励しました。取引は予想以上に良好で、その結果、藩の財貨は常時50万両ほど蓄えることができたといえます。



▲小楠(右)と三岡八郎の像
(福井市 内堀公園内)

同年8月にかつての同志であった米田是容が病死(47歳)し、10月には友人で実学主義を唱えていた橋本左内が幕府を批判したとして処

刑(26歳)されました。さらに、12月、実母の危篤の報せに、小楠は急ぎ帰国しましたが、沿山津に着いた時は既に亡くなっていました。72歳でした。

万延元年(1860)2月、越前藩の招きで3回目の交流が始まり、福井で新たに越前藩主となった松平茂昭※と会いました。越前藩での小楠の信望は日に日に高まっていましたが、藩内に保守と進歩の両派が発生し、対立するようになりました。そこで、小楠は拳藩一致※に力を尽くし、『国是三論』を著しました。その内容は「富国論(天)」「強兵論(地)」「士道(人)」で構成され、「富国論」では、国(藩)が積極的に外国貿易や殖産興業に取組み、士・民を豊かにすること、「強兵論」では、西欧諸国がアジア侵略を企てようとしている今日、わが国を防衛するには海軍を盛んにすること、「士道」では、文武の源は一つであり、精神修養が大切であることを論じています。

※国是…国(藩)の方針。

※殖産…産業を盛んにし、生産をふやすこと。

※三岡八郎(1829～1909)…別名 由利公正。小楠の門人。のちに明治新政府の基本方針『五箇条の御誓文』の原案をつくる。

※生糸…蚕の繭をときほぐして糸にしたもの。

※養蚕…蚕を飼って繭をつくらせる仕事。

※松平茂昭(1836～90)…越前藩主松平慶永が幕府より隠居・謹慎させられ、支藩系魚川藩主から越前藩主になる。

※拳藩一致…藩全体がひとつにまとまること。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



▲松平春嶽肖像写真
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

小楠が招かれて越前福井に来た初めのころ、藩主松平慶永は、將軍家定の跡継ぎ問題*などで幕府と対立し、のちには藩主を辞めさせられ、江戸から離れることができませんでした。このころから慶永は春嶽を名乗ります。その後、大老井伊直弼*が暗殺されて春嶽の謹慎*が解け、春嶽は小楠と会うことができるようになりました。

13 松平春嶽と初の対面

小楠を福井に招いた直後から、小楠とぜひ面会したいと願っていた春嶽は、万延元年(1860)2月から福井に3回目の交流で来ていた小楠に対し、江戸に出て来るように頼みました。そこで小楠は、肥後藩から許しを得て、翌年の文久元年(1861)3月下旬、福井を出発し、4月に江戸に着きました。

小楠との対面がようやく実現した春嶽の喜びは大変なものでした。小楠は手紙(同年4月19日付)で、「春嶽様は毎日お出でになって御話し合いなされ、学問の大事な点などよくご理解される。御父子(春嶽と茂昭)様や家老の方々との会合も既に4回おこないました。毎回正午より夕方まで話し合いましたが、殿様と家臣との間柄は家族の集まりのようです。私への対応も手厚く、御父子は次の間まで送り迎えなされ、足痛のこともご存知のようで敷物までご用意なされる程です。」と言い、越前藩重臣の中根雪江も「総て師資の礼を以てご接待なされた。学問講義の日には自分も出席したが、御役人共も用事のない者は同席して拝聴するように命じられた。」と語っています。また、江戸滞在中に、小楠は幕臣の勝海舟や大久保忠寛*とも親しく行き来しています。

小楠は、福井や江戸で1年以上滞在したため、故郷を思う気持ちが高まってきました。そこで、春嶽父子に帰国の許可を得て、ひとまず福井に立ち寄ったのち、文久元年(1861)10月、7人の福井の書生を

連れて沼山津に帰りました。1年8か月ぶりに帰国した小楠は、母や兄が眠る往生院(熊本市池田)で墓参りを済ませ、小楠の帰りを待ち焦がれていた門生や、福井の書生たちへの講義で多忙な日々を送ります。

ところが、講義が休みの11月26日、小楠は近くに狩猟に出かけ、「榜示犯禁事件」を起こします。沼山津一帯の沼沢地は藩主専用の鷹狩りをする場所で、標識(榜示木)が立つ禁猟区になっていました。しかし、小楠はその場所で残った弾を射ち放したため、監視の役人に見咎められ、謹慎しなければなりません。

文久2年(1862)、小楠は、越前藩による4回目の招聘を受けて、同年6月、熊本を発ちました。途中、春嶽からの急使により直接江戸へ直行し、7月6日、江戸壺岸島*にある越前家別邸に着きました。

*跡継ぎ問題…徳川家定(第13代将軍)の跡継ぎについて、大老(幕府の最高職)井伊直弼を中心とする幕府と、御三家の徳川斉昭(水戸藩主)・松平春嶽・島津斉彬(薩摩藩主)ら5人が対立。その結果、井伊大老の推した紀州家の徳川慶福(のちの第14代将軍家茂)を内定した。

*井伊直弼(1815~60)…

幕末の彦根藩主(30万石)。幕府の大老となり、天皇の許し(勅許)なしに外国条約を調印し、将軍跡継ぎ問題などで反対する大名・公家・武士たちを弾圧(安政の大獄)。のちに水戸浪士らにより桜田門外で暗殺された。

*謹慎…刑罰の一つで、ある場所に居させて外出を許さないこと。

*大久保忠寛(1817~88)…号は一翁。江戸末期の幕臣(将軍直属の家臣)。外国奉行などを歴任し、江戸開城に尽力する。

*壺岸島…隅田川河口先の島だったが、埋立てなどにより現在は陸続き。東京都中央区の一部。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



▲徳川慶喜肖像写真
(福井市立郷土歴史特別館蔵)

長期にわたる財政難や外国への対応、尊王攘夷運動*の広がりなど、多くの課題をかかえた江戸幕府は、それらを解決するために政治の仕組みを変えなければなりません。文久2年(1862)7月、幕府が将軍後見職に一橋慶喜*、新設の政事総裁職(大老相当職)に松平春嶽を任命したのもその表われです。

14『国是七条』の建白

松平春嶽が政事総裁職に就任したころ、小楠は幕府への建白書(提言書)を書いていました。それは小楠の建白書類の中で特に有名な『国是七条』です。

春嶽はこの『国是七条』を幕政の方針にして改革に乗り出しました。当時の幕府にとって、これらの一つひとつは幕府の興亡にかかわる大問題でしたので改革に消極的でしたが、同年8月になって、幕府の大目付*岡部長常は小楠を招き、『国是七条』の内容について詳しい説明を求めました。そこで小楠は、天下の人心がゆらいでいる今日、まず将軍が京都朝廷に出向いて尊王の誠を示すことが大事であること、次に各藩の財政を困窮させている参勤交代や大名の妻子の江戸居住をゆるめるか廃止すること、さらに外国の圧力に対処するためには海軍の兵力の強化が必要であることなどを提言しました。岡部から話を聞いた慶喜や老中は、小楠の優れた判断力や考えに大変驚いたそうです。

その後、小楠は一橋邸に参上して慶喜に会い、幕政に関する意見を述べています。翌日、慶喜は春嶽に「昨夜、横井平四郎(小楠)に対面したが、非常に優れた人物でひどく感心した。話の中で、随分難題と思える事例に尾ひれをつけて問うたが、少しも滞ることなく返答した。拙者どもの思っていることより数段上の意見を持っている」

『国是七条』(要約) 文久二(一八六二)年

- 一、大將軍は上洛してこれまでの無礼を謝る。
- 一、大名の参勤交代をやめて述職*に変える。
- 一、大名の妻子を国許に帰す。
- 一、各藩から人材を登用して幕府の役人にする。
- 一、多くの人の意見を取り入れて天下と公共の政治を行う。
- 一、海軍をつくり軍力を高める。
- 一、自由貿易をやめて官貿易をする。

(村田氏壽著『續再夢紀事』)と話しています。

同年閏8月、幕府は参勤交代制度を改革しました。その主な内容は、参勤は3年に1回でよい、在府の期間も100日にちぢめる、妻子が国許に帰ることを許すというもので、この改革を『文久の改革』といいます。

一方、京都には、幕府の違勅調印などに反対する尊王攘夷派の志士が全国から集まっていました。なかでも、長州藩は三条実美*らと提携して朝廷に働きかけ、将軍の上洛と攘夷の決行を幕府に迫りました。彼らは、慶喜や春嶽が幕府の重要な役に就いたことで、攘夷を実行してくれると信じましたが、小楠については、越前藩邸を訪れた長州藩の桂小五郎*が「この頃世間では、横井小楠は勤王の志がなく天下のためにならないので、今後出会ったら暗殺すると噂している。」と警告しています。

※尊王攘夷運動…幕末に、違勅調印に反対する尊王論(天皇制)と鎖国を堅守し外国との条約に反対する攘夷論(外国人排斥)が結びつき、幕府の専制と開国政策を批判して行動した運動。

※一橋慶喜(1837~1913)…父は御三家水戸藩主徳川斉昭。一橋家を相続し、第14代将軍家茂の後見職(補佐)となる。家茂の死後、第15代将軍となり徳川を名乗る。江戸幕府最後の将軍。

※述職…大名が登城し将軍に領内の政務に関して報告すること。

※大目付…老中の配下で、大名の監視などを行った。

※三条実美(1837~91)…尊王攘夷派の公卿(身分の高い公家)。政変により一時長州に逃れたが、のち明治新政府の大臣になる。

※桂小五郎(1833~77)…幕末期の萩(長州)藩士。のちに木戸孝允を名乗る。坂本龍馬の仲介で、薩摩藩の西郷隆盛らと薩長連合を結び。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



事件は、文久2年(1862)12月19日、江戸で起きました。この日の夜、小楠と吉田平之助・都築四郎は吉田の別宅で酒を酌み交わしながら懇談していました。すると突然数人の曲者が襲ってきました。刀が身近になかった小楠は、宿舎の越前藩邸に刀を取りに行き、急いで現場に戻って来ましたが、吉田らは瀕死の重傷を負っていました。事件の状況について小楠の自宅宛手紙(同年12月21日付)をもとに一部を再現してみます。

15 小楠暗殺未遂事件

「私(小楠)は、近日中に京都に赴く肥後藩江戸留守居(江戸藩邸に勤務し、幕府や諸大名との交渉や連絡・情報収集などを行う)吉田平之助と面談の用事があったので、12月19日の夕方4時過ぎ、櫓物丁(現東京都千代田区八重洲)にあった吉田の別宅を訪れました。そこに都築四郎・谷内蔵允(いずれも肥後藩士)も加わり、用談後、2階で別れの酒宴を開きました。途中で谷は帰りましたが、夜8時を過ぎた頃、突然覆面抜刀した2人の曲者が掛け声もろとも2階に駆け上がってきました。2階の上がり口際にいた私は、不意のことであり、床の間に置いた大小の刀を取る間もありませんでした。もう1人の曲者が階段を上がって来ましたが、刀を持たない私は、身をかわして素早く階段を降り、10丁くらい(約1km)離れた宿舎の常盤橋越前藩邸へ駆け帰り、差替えの大小を取って現場に戻って来ました。しかし、曲者はすでに退散した後でした。吉田は瀕死の重傷(のち死亡)でした。都築も手傷を負いましたが、命に別状はありませんでした。」

小楠は傷を負って倒れている吉田・都築両人を肥後藩邸に送り届け、一通り事情を話して越前藩邸に帰りました。そして、翌20日、小楠は事故の届書を肥後藩邸に提出しました。

ところで、小楠らを襲撃した刺客(曲者)3人は一体何者だったのでしょうか。肥後藩重役沼田勘解由は事件の翌日、越前藩中根雪江に「昨日、龍ノ口(肥後藩邸)詰の足軽兩人(黒瀬・安田)が亡命し、吉田を斬りに行くと申していた。」と告げています。このことから刺客

の2人は分かりましたが、もう1人は事件の3か月後に判明しました。文久3年3月22日、京都南禅寺裏山で自殺した一浪士があり、死に際して着ていた白衣から肥後藩を脱藩した足軽の堤松左衛門と分かりました。堤は肥後勤王党の宮部鼎蔵から武道を、同党の轟木武兵衛から学問を学んでいました。堤の白衣の血書に「江戸に居る売国の土横井平四郎を斬らんとしたが失敗した。故に自刃して国家に謝す。(要約)」とあったことから、この事件は開国論を唱えている小楠と江戸留守居の吉田の暗殺が目的で、勤王の感化を受けた堤が首謀者であったと思われます。

さて、小楠は刺客に襲撃された時、傷ひとつ負いませんでした。それ故、敵に立ち向かわずに友を死地に残し、独り脱出したのは武士にあるまじき振舞いで、士道忘却だとの非難が肥後藩側に相次いで起こりました。そこで、肥後藩では直ちに越前藩邸より小楠の身柄を引取り、送還することを決めました。一方、越前藩では事件直後から善後策をたて、肥後藩重役の沼田勘解由に会いましたが、沼田は小楠を肥後藩邸に引取り謹慎させたいと伝えて来ました。それを聞いた松平春嶽は直接沼田に会い、「小楠は沼山津に閑居して居れば無事であるのに、自分が無理に招聘し、また深く信頼していたばかりにかかる災難が勃発したのだと思うと、甚だ気の毒にて心痛に堪えない。肥後藩の掟をかれこれ言うべきではないが、どうか自分の心中を察して寛大な処置に及ぶよう」と頼んでいます。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



江戸で襲撃事件に遭った小楠は、事件後、江戸を去って福井に行き、翌年の文久3年(1863)8月まで福井に滞在しました。このころ、京都では尊王攘夷派の運動がますます活発になり、その中心となっている長州藩*と公武合体派*の薩摩藩*が対立したり、朝廷内でも公卿が両派に分裂したりするなど混乱状態が続いていました。

16 知行召上・士席差放

文久3年8月11日、小楠は帰国の途につきました。1858(安政5)年から1863年までの6年間、江戸を含めて4回にわたり、越前藩政や幕政の改革に力を尽くしてきた越前交流によいよ別れを告げるようになったのです。春嶽は小楠の帰国にあたって越前藩士3人を熊本まで付き添わせました。それは肥後藩に対して、多年にわたって小楠を借用したことへの謝辞を伝えることと、暗殺未遂事件での小楠に対する処分の軽減を切望するためでした。

越前藩士と共に福井城下を出発した小楠は、三国港(越前国)より乗船し、海路長崎を経て、8月25日、熊本に帰り着きました。小楠の門人(塾生)らは熊本城の北の郊外にある山伏塚(現熊本市池田)まで出向いて小楠を迎えました。当時、肥後では、小楠が帰国すれば、前年の文久2年12月19日に起きた暗殺未遂事件(土道忘却とみられていた)により厳罰に処せられるだろうと、噂されていました。それを聞いた門人たちは深刻に悩み、「郊外で先生に切腹を勧めよう」と決めていました。ところが、出迎えの門人たちに会った小楠は、大変喜び、門人たちの悩みなどつゆ知らず、先頭に立ち、さっさと熊本城下に入ってしまった。

さて、帰藩の届けを提出した小楠は、沼山津で謹慎しながら肥後藩庁からの処分を待ちました。肥後藩では、保留していた小楠の処分について検討を始めました。肥後藩側は、曲者に立ち向かわなかった小楠の行動は武士道を欠き、土道忘却だと非難しました。

一方、越前藩側は、国家のために尽くしている人物(小楠)が襲われたもので、単に武士道を欠いた者と同一視すべきではない。刀を取りに行ったのは当然の行動だと小楠を弁護しています。

肥後藩による小楠の処分は事

件後1年を経過した同3年12月16日に申し渡されました。その内容は「(抜刀した曲者に襲撃された折)土道を忘却致したことは御国の恥で怪しからぬ事であるが、寛大(大目に見る)に取り計らい、御知行召上げ士席差し放される」というものでした。この処分は、知行(家禄)の150石を没収し、士席(武士の身分)を取り上げることです。この結果、小楠は浪人になり、家族は経済的に大変苦しくなりますが、切腹は免れました。門人たちは「先生のお命さえあれば、これからの時勢にお役に立つこともできる」とひと安心しました。家族も同じ気持ちではなかったかと察せられます。

※長州藩…現在の山口県。幕末には藩主毛利氏が萩城を居城としたため萩藩ともいう。のち藩庁が山口に移る。

※公武合体派…幕末の政治的安定を図るには朝廷(公)と幕府(武)の協力が必要とする考え方のグループ。

※薩摩藩…現在の鹿児島県。島津氏が藩主で鹿児島藩ともいう。

越前交流期間中の幕末の動き (1858年3月～1863年8月)

期	年代(西暦)	年齢	主な事柄(関係分)
I	安政5 (1858)	50	・越前藩校で藩士に講学 ・日米修好通商条約(違勅調印) ・越前藩主松平慶永に隠居謹慎
II	安政6 (1859)	51	・越前藩に殖産貿易を指導 ・吉田松陰ら刑死(安政の大獄)
III	万延元 (1860)	52	・『国是三論』を著す ・桜田門外で大老井伊直弼暗殺 ・松平春嶽(慶永)の謹慎免除
	文久元 (1861)	53	・小楠、江戸で春嶽と初対面 ・勝海舟らと交流
IV	文久2 (1862)	54	・『国是七条』を建白 ・春嶽が政事総裁職に就く ・「文久の改革」公布 ・小楠暗殺未遂事件(土道忘却?)
	文久3 (1863)	55	・将軍徳川家茂が上洛 ・小楠、越前を去り帰国(8月) ・小楠処分【知行召上・士席差放】

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



勝海舟は「横井小楠の事は、尾張の或る人から聞いていたが、長崎ではじめて会った時から、途方もない聡明な人だと敬服した」「あれが米国から帰った時に、彼(小楠)が米国の事情を聞くから色々教えてやったら、一を聞いて十を知るという風で、忽ち彼の国(米国)の事情に精通してしまった」と言っています(『氷川清話』)。また、海舟日記や手紙では、小楠に対して常に「先生」の敬称を用いています。



▲勝海舟(椅子)肖像写真
(福井市立歴史博物館蔵)

17 勝海舟との交流

小楠と海舟の最初の出会いの時期ははっきりしません。ただ、前記『氷川清話』に横井小楠のことは「長崎ではじめて会った時から」とあり、これが事実であれば、海舟の長崎伝習時代(1855~1859年)となりますが、確証はありません。なお、この期間に海舟は航海訓練を行い、1857・58年の2回、現天草郡苓北町(当時は天領)に来航して富岡の鎮道寺に止宿※しています。

さて、小楠と海舟が江戸でお互いに往来したことについては、小楠の手紙などから窺い知ることができます。その時期は、越前招聘中の文久元年(1861)4月からの江戸滞在期間ですが、2人の交際が一層頻繁になり、親密になったのは、同2年7月に松平春嶽が政事総裁職に就任し、小楠はその顧問として幕政に関わっていたころです。当時、海舟は、軍艦奉行並※で、幕閣の意見の不統一を嘆きながらも、諸藩の人材を登用し、海軍の強化に努めることが大事だと強調していました。この意見に賛同したのは、外国との交わりは対等でなければならず、外国の圧力に屈してはならないと主張する小楠ら少数の人たちでした。海舟との対話の中でも小楠は、「最近、開鎖(開国と鎖国)の論が盛んだが、今急務とすべきことは国を興す(国力を強くする)ことである。そのためには諸侯が一致して海軍を盛大にしなければならぬ。しかしながら、このことに着眼する者がいないことは嘆かわしいことだ。」と言っています。

元治元年(1864)2月、海舟は、幕命により連合艦隊の下関攻撃※を

延期させるために長崎にやってきました。その途中、従えて来た坂本龍馬を沼山津の四時軒に遣わしています。その前年に肥後藩から士席剥奪され謹慎していた小楠に、時事問題を伝え、金品を贈るためです。この折、小楠は甥の左平太・大平などを神戸の海軍操練所※に入所できるよう龍馬を通して海舟に依頼しました。長崎からの帰途の4月、海舟は再び龍馬を四時軒に遣り、先に小楠から依頼があった2人の甥と藩士1人を預かり、神戸へ連れて帰ります。同年5月、海舟は軍艦奉行(役高2千石)に任じられ、海軍操練所が開所されます。入所については募集の布告も出されていますが、左平太なども含め諸藩からの入学生が多かったようです。しかし、同年11月になると海舟は御役御免となり、海軍操練所も閉鎖されました。なお、左平太と大平は長崎に移って語学を学び、慶応2年(1866)4月、渡米することになります。

※鎮道寺に止宿…本堂の柱に「日本海軍指揮官 勝麟太郎「蒸気の御船にのりて再び爰に旅寝せしかば、たのまれぬ世をば経れどもちぎりあればふたゝ爰に月を見るかな 勝義邦(海舟)」の落書きがある。

※軍艦奉行並…幕府の役職名で、軍艦奉行と同等職。役高は千石。

※連合艦隊の下関攻撃…長州藩の外国船砲撃事件(1863年5月)の報復として、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国連合艦隊による下関攻撃。海舟の努力も空しく1864年8月に攻撃が行われた。

※海軍操練所…幕府が軍艦操縦を教えるため神戸に設けた機関。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



横井小楠と坂本龍馬※との出会いの場所は、江戸と福井、そして熊本(四時軒で3回)が挙げられます。龍馬は、四時軒での3回目の会談で、小楠と激論をたたかわせて決別し、最後の出会いになってしまいましたが、その後、「当時、天下の人物9名」(兄宛の手紙)の中に、横井小楠の名前も挙げています。

坂本龍馬肖像写真▶
(写真提供:高知県立坂本龍馬記念館)



18 坂本龍馬と四時軒

小楠と龍馬の初めての出会いについては、『春嶽手記』に「文久2年(1862)の7月(閏8月の説あり)、坂本龍馬と岡本健三郎(土佐藩士)が越前江戸藩邸に来て、自分(春嶽)と面会し、『海舟と小楠は常々暴論を吐き政治の妨害になっていると聞きます。2人に会ってみたいので、海舟と小楠を紹介してください』とのことであった。そこで紹介状を書いて与えた。両人はその紹介状を持って海舟や小楠に面会に行った。」(要約)との記事があります。当時、小楠は越前藩邸に居たので、そこで龍馬と会ったようです。なお、海舟を訪れた龍馬は、海舟から世界情勢を詳しく説き聞かされて感動し、海舟の門人になっています。

文久3年5月、龍馬は海舟の命令で福井を訪れています。小楠の指導による殖産貿易で藩財政が豊かになった越前藩に海軍操練所の資金を援助してもらうためです。龍馬は福井に着くや、まず小楠に会って来意を告げています。そして小楠を通して春嶽から5千両の資金援助を受けることができました。また、この時、小楠と龍馬は三岡八郎(由利公正)とも会っています。『由利公正伝』によると、「或る夜、外出先から帰ると、小楠が坂本と一緒に小舟に棹さしてやって来た。そこで3人で囲炉裏を囲み飲み始めたが、坂本が愉快極まって『君が為 捨つる命は惜しまねど 心にかゝる国の行く末』という歌を謡った。」とあります。

さて、龍馬が初めて四時軒を訪れたのは元治元年(1864)2月で、次いで4月です。海舟が幕命で長崎へ行った途次で、同道した龍馬を

四時軒に遣わしています*。また、龍馬個人としては、薩長同盟を画策していた慶応元年(1865)5月、薩摩からの帰りに四時軒に寄っています。その時の様子を徳富蘆花は父一敬から聞いた話として自著『青山白雲』に次のように記しています。

「坂本(龍馬)は薩摩からの帰りがけと言ったが、今思えば薩長連合(同盟)に骨折る最中であつたので、白の琉球紵の単衣に鍔細の大を差しており、衣服は大久保(利通)*の呉れた物と言っていた。酒が出て人物評が始まった。小楠が『おれはどうだ』と聞くと、坂本は『先生は、2階に上がって酒を飲みながら、西郷*や大久保共がする芝居を見物しててください。大久保共が行き詰った時はちよいと指図をしてください』。小楠は笑って頷いた。」

ところが、龍馬側の資料によりますと、幕府による第二次長州征伐のことも話題になり、それに肥後藩が参戦することの是非について議論しています。小楠があくまで長州の非を断じ、征伐の正当性を主張したことに龍馬が激しく批判し、遂には口論になったということです。その後2人は会うことがありませんでした。

※坂本龍馬(1835~1867)…土佐藩(高知)の町人郷士。脱藩して勝海舟の弟子になるが、のち海援隊長になる。薩長同盟締結に尽力し、將軍徳川慶喜による大政奉還を実現させた。国家体制についての意見書『船中八策』は有名。慶応3年、京都近江屋で暗殺された。

※龍馬の四時軒訪問(1864年2月・4月)…『市政だより』9月号参照。

※大久保利通(1830~1878)…薩摩藩士。西郷隆盛らと討幕運動を推進。明治維新後、政府の実権を握る。のち不平士族に暗殺される。

※西郷隆盛(1827~1877)…薩摩藩士。第二次長州征伐以後、討幕派となり薩長同盟、王政復古、戊辰戦争などを指導する。勝海舟と会談して江戸城無血開城も実現。明治維新後、政府の首脳となるが、明治10年の西南戦争に敗れて自刃した。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



暗殺未遂事件の処罰により浪人となった小楠は、沼山津で静かに暮らしました。その間、坂本龍馬の来訪もありましたが、肥後藩の井上毅いの上 ことしや元田永孚なが ざねなども四時軒を訪れ、小楠と対談しています。

19 沼山津隠棲

小楠は沼山津に隠棲いん せいしましたが、自分も学び、人をも教えようとする熱意は衰えることなく、門人への教導きょうどうは勿論、農民や漁夫、商人などに対しても、教おしえを請こえば喜んで教おしえ、また教おしわりもするという具合でした。さらに、国の政治のなりゆきについては常に心を配あづかっていました。小楠の長女みやみややみやの話によると、母から「お父様はどんな時でも天下国家のことをお忘れになることはなかったよ」とたびたび聞かされたそうです。

さて、元治元年(1864)秋、井上毅が友人と四時軒を訪れ、小楠と語り合っています。井上は肥後藩家老米田家の家臣で後に文部大臣になった人です。当時は藩校時習館ときしゅうくわんの居寮生きりょうせいでした。井上はその時の対談の内容を『沼山対話』(問答形式)に記しています。その内容は、学問のこと・宗教のこと・交易(貿易)のことなど、多方面にわたっています。

その一部を紹介しますと、学問について小楠は「まず己おのれに思う(自分で考えてみる)ことが大事で、分からない時に古人の説を参考にすべきである、また如何に多くの知識を得ても、活用しなければ意味がない。」と言っています。宗教については、井上から尋ねられたキリスト教と仏教の違いについて、その類似点や相違点を述べています。さらに交易については、「米づくりにかたよる農業だけでは生活に役立たず、また国内だけの流通では物が滞とどまってしまい、外国(西



▲井上 毅 (国立国会図書館蔵)



▲元田 永孚 (国立国会図書館蔵)

洋)との交易が必要である。その場合、交易する国々が自国のことばかり考えて他国を顧みないということがないようにすることが大切である。」と小楠は強調しています。

次いで、慶応元年(1865)秋には元田永孚が四時軒在あ宅の小楠を訪れて対談し、元田は自ら筆記した『沼山閑話』いん せいの かんわを著しています。その内容から、宋儒(朱子学)の論じる政治は堯・舜・三代ぎょう しゆん さんの政治と異なる、日本と西洋の学問は考え方に違いがある、幕府は私的政治を行ってはならないなどについて話し合ったことがわかります。

※井上毅(1843~95)…米田家の家塾必由堂ひつゆうどうで勉学、のち時習館で学ぶ。明治新政府の司法省に入り、ドイツに派遣される。大日本帝国憲法や教育勅語きくごの起草(原案づくり)にあたり、第2次伊藤博文内閣の文部大臣に就く。

※元田永孚(1818~91)…肥後藩士(家禄550石)。時習館居寮生のとき、小楠と出会い、小楠らの儒学研究会の一員となる。のち高瀬藩奉行。明治4年(1871)宮内省に入り、明治天皇の侍講(学問を講義する職)となる。また、井上毅と教育勅語の起草にあたった。

※隠棲…世間から離れて静かに暮すこと。

※長女みや…小楠とつせ子には一男一女がいた。長男は時雄(1857年生まれ)、長女はみや(1862年生まれ)である。

※三代…大洪水を治めた禹の夏王朝、日々新たな気持ちで治世を行った湯王の殷王朝、太公望などを登用した文王・武王の周王朝。

このコーナーは、菅 秀隆すが ひでたかさん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—

慶応2年(1866)4月、横井小楠の甥左平太・大平※兄弟が米国留学のため、長崎から船出しました。小楠はその出発に当たって、2人にはなむけの言葉を与えています。それは「堯舜孔子の道」の書き出しではじまる『送別の語』です。

20 二甥の渡米と『送別の語』

小楠は、将来の状況を見越して、亡くなった兄時明の子である左平太・大平を国家のために役立つ有用な人材に育て、西洋のことを実地に学ぶことを勧めたいと心に決めていました。そこで、元治元年(1864)、四時軒を訪れた坂本龍馬を介して勝海舟に2人を預け、神戸の海軍操練所に入所させたのです。しかし、翌年の慶応元年(1865)に海軍操練所が閉鎖されたため、2人は長崎に移り、長崎語学校に通ってフルベッキ※から指導を受けました。左平太と大平は語学(英語)の研鑽に励むうち米国留学を志し、翌年4月、渡米が実現しました。甥の左平太22歳・大平17歳、そして小楠が58歳の時です。

この時、小楠は『送別の語』を2人に与えました。これを要約すると、「これからの日本は、古代中国の聖天子といわれる堯・舜・孔子が行った道徳的政治を基本に据えて、西洋の科学的文明を積極的に取り入れなければならない。そして、ただ単に富国強兵で終わるのではなく、日本が先頭に立って正義人道を世界に広め、真の世界平和を作らねばならない。」と強調しています。特に前半の語句は、小楠の理想と信念を簡潔に表わしたものといえます。なお、後半の語句は2人の修養に関する内容です。

ところで、米国に留学するためには学資と渡航費用などが必要です。これらの資金集めについては門人が積極的に関わっています。

『送別の語』 慶応二年(一八六六)
堯舜孔子の道を明らかにし
西洋器械の術を盡くす
何ぞ富国に止まらん
何ぞ強兵に止まらん
大義を四海に布かんのみ
心を逆らふこと有るも人を尤むること勿れ
人を尤むれば徳を損ず
為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ
心に正にすれば事を破る
君子の道は身を脩むるに在り

「旅費と学費は、門人と云ふ中にも輩北の徳富兄弟※が父太善次を説いて貯蔵の古金や山を売って弁じました。」(徳富蘆花著『竹崎順子』)とあり、長崎滞在中の門人たちも別途に旅費を調達しています。さらに、当時の海外出国※は国禁でしたので、乗組員(水夫)として使船によって渡航することにしました。そのため幾度も船長と交渉し、やっと志が通じて乗船できました。2人は半年後にはニューヨークに着きましたが、着米後の身の振り方についてはフルベッキが親身になり米国の友人への紹介状も書いてくれました。

2人は航海学校などに入学し、学業に実地訓練に意欲的に取り組みましたが、明治2年(1869)末に病気がかかった大平は単身帰国しました。帰国後の大平は、洋学校設立と外人教師招聘のために奔走し、ジェーンズ※を洋学校教師として招くことができましたが、それを見ずして亡くなりました。

※左平太(1845~75)・大平(1850~71)…父は小楠の兄時明、母はきよ。左平太は明治5年(1872)帰国するが、再渡米し、政治・法律を学ぶ。同8年帰国し元老院権少書記官となる。

※フルベッキ(1830~98)…オランダに生まれ、米国に移住して宣教師となる。安政6年(1859)来日して長崎に住み、佐賀藩の学校などで教える。明治2年上京し明治政府顧問格となる。

※徳富兄弟…徳富太善次の男子に一敬・一義・高廉・昌龍が居た。

※海外出国…当時は国禁のため左平太は伊勢佐太郎、大平は沼川三郎と変名して渡米したが、出帆後間もなく、幕府は学術修業や商業目的の海外渡航を許可している。

※ジェーンズ(1837~1909)…米国陸軍大尉。明治4年(1871)8月、家族と共に来熊し、同年9月に熊本城古城に開校した熊本洋学校の教師となる。同9年任期を終え、離熊。当時の洋学校教師館は現在熊本市水前寺公園にある。

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。



横井小楠 —その業績と生涯—

慶応3年(1867)10月、第15代将軍徳川慶喜は大政奉還(国の政治を天皇にかえす)を朝廷に申し出ました。この大政奉還は、土佐藩前藩主山内曾登が慶喜に建言したことによるもので、建言の内容は坂本龍馬の起草した『船中八策』が参考にされたといわれます。続いて同年12月には王政復古の大号令が出されました。これは従来の摂政・関白(朝廷の制度)や将軍(幕府)を廃止して、新たに維新・慶応・参与の三職を創設し、天皇親政による新政府の樹立をめざしたものでした。

21 小楠 士席を復す

慶応3年12月18日、肥後藩長岡麿美*と横井平四郎(小楠)に「新政府に登用したいので直ちに上京せよ」との通知書が朝廷から京都の肥後藩部に届きました。これは新たに発足した新政府の人材登用の必要から呼び寄せられたもので、肥後藩からも既に家老溝口孤麿や京都留守屋津田山三郎が出仕していました。小楠登用の知らせが熊本に届いたのは年末の押し迫った頃だと思われそうですが、小楠自身にも知らせが伝わったようで、米国滞在の二弟への手紙(慶応4年=明治元年正月3日付)に「拙者も一兩日には京都に上るように仰せ付けられる模様」と書いています。

ところが肥後藩は、小楠の登用に対して、藩内に異議が多く、また既に土道忘却との理由で家格を取り上げ士席(藩士)を剝奪したこともあって、「平四郎儀、近年病気で朝廷の御用に差し出すのは難しい状態」なので辞退したいと、朝廷に申し出ています。新政府への登用は小楠の門人にも召命がありましたが、これも肥後藩は断っています。

一方、長岡麿美は、明治元年(1868)2月21日、召命を受けて上京し、参与職を命ぜられました。そして3月5日、副總裁の岩倉具視*に小楠の召命を辞退する書を提出しました。しかし、岩倉は「小楠の江戸表での動靜についても聞いており、才知の優れた人物であることもよく承知している。心配には及ばない」と内示し、同月8日に「御用につき上京するように」との召命が再び出されました。

このように岩倉の内示や再度の召命があっても、肥後藩としても放っておけず、小楠を上京させるばかりはないと藩論で一決しました。そこで、藩政府は、3月20日付で、小楠暗殺未遂事件関係者で士席

を剝奪されていた岩倉兵衛(四郎を改名)と小楠の2人の士席を復し、さらに同月22日、小楠に対し上京を命じました。

今回の小楠の召命上京については、当人はまたとない機会として勇躍お受けしたことは間違いない。門人たちも大変喜び

祝福したことは言うまでもありません。特に情報を速やかにキャッチできる在京の門人安嶋保和は、同じく京都に滞在していた内藤泰吉らと祝杯をあげています。ただ小楠の親友元田永孚だけは「先生が召命に応じることはまだ早いと思う。ひそかに先生の身に危む所あって、素直に喜べない」(自著『運慶之記』)と述べています。

※『船中八策』…坂本龍馬が立案した新しい国家体制論。その内容は、大政奉還をはじめ、国会開設、外国交際、海軍拡張など8か策である。この建言は小楠の『国是七条』をもとにしたものといわれる。

※維新・慶応・参与…明治政府初期の高位の官職。維新は有栖川宮徳仁親王。

※長岡麿美(1842~1906)…幕末の細川藩主前藩の弟。分家して長岡姓を名乗る。明治3年に熊本藩大参事となり、藩知事の次兄慶久を助けて実学党の徳富らを抜擢し、藩政改革を行った。

※岩倉具視(1825~83)…公卿・政治家。公武合体を唱え、和宮降嫁を策す。維新後、副總裁・右大臣となり、政府首脳を率いて渡欧。征韓論には反対する。

このコーナーは、菅野さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

幕政の推移と小楠の動向(1868年~1868年)

年号(西暦)	月	主な出来事
慶応3 (1867)	1	龍馬と長州が同盟を結ぶ(薩長同盟)
	4	横井小楠が『送別の手紙』を二領に送る
	7	第14代将軍徳川慶喜が病死(21歳)
	12	第15代将軍に徳川慶喜が就く(30歳)
	12	徳川慶喜が参内(33歳)
	慶応4 (1868)	1
8		坂本龍馬が『船中八策』を起草
10		徳川慶喜が大政を奉還する(大政奉還)
11		坂本龍馬が斬殺される(33歳)
12		王政復古の大号令が出され新政府ができる
12		横井小楠への朝廷の召命を肥後藩が断る
慶応4 (明治元) (1868)	1	元田永孚(薩長藩士×旧幕府軍)が参内
	3	再び召命があり肥後藩は小楠の士席を復す
	4	小楠は新政府の政務に就くため上京する
	同4	小楠が参与に任命される(60歳)
	9	「明治」に改元される(9月8日)

横井小楠 —その業績と生涯—

王政復古により発足した新政府は、徳川慶喜に内大臣辞退や所領返上を命じましたが、慶喜はこれを拒んで大坂城に退き、慶応4年(1868)元旦、討薩の表(文書)を朝廷に差し出しました。1月3日、会津・桑名両藩*兵を含む約1万5千人の旧幕府軍は鳥羽・伏見(現京都市)で薩摩・長州両軍5千人と戦いました(戊辰戦争*の始まり)が、装備で勝る薩長軍に大敗し、4月11日には江戸城明け渡し(無血開城)が行われます。その3日前の4月8日、横井小楠は新政府の要人として京都に旅立ちます。

22 明治政府の参与に就任

肥後細川藩士に復し、新政府より召命された横井小楠は、慶応4年(明治元年)4月8日、坪井川河口の百貫石港(現熊本市松尾町)から肥後藩船凌雲丸*に乗船し、上京しました。

同月11日に大坂に到着すると、ちょうど天皇が行幸中で、肥後藩世子*の細川護久や越前藩士三岡八郎(由利公正)も供奉を命ぜられて大坂に滞在していました。三岡はすでに新政府の参与として財政を担当し、小楠の上京をひたすら待っていましたので、大喜びで出迎えました。小楠は在坂中の同年4月22日に徴士参与*を命ぜられ、同年閏4月4日に京都に入りました。ところが、小楠は慢性的な泌尿器関係の病気のため外出できず、12日に初めて新政府の役所(京都御所内)に出勤しました。

小楠は入京直後から大変多忙な日々を過ごしています。自宅宛(閏4月13日付)の手紙に「京着以来、昼夜来客大ひま無しで、風邪の養生もできません。勤務は午前10時から午後4時までで彼是多用、その上退勤後、直ちに岩倉邸に参り、夜10時頃に帰宅しています。このように繁用で、誠に困っています」とあります。小楠は召出された人たちの中では最年長者で、しかも識見は抜群でしたので、岩倉具視には特に信頼され、小楠の献策が用いられていたようです。しかし、このような激務は病気にも悪く、5月下旬より病勢は増し、高熱を出して重篤になりました。7月に危険状態を脱し、9月初旬には快方に向かいましたので、同月15日より再び出勤することができました。

さて、閏4月21日、官制改革が行われ、小楠は徴士参与中から選抜



▲凌雲丸(東京大学大学院総合文化研究科蔵)

されて新たに参与に任命されました。そして、翌22日には「従四位下*」の位を授けられました。小楠は早速飛脚でこの吉報を家族に知らせていますが、因みに肥後藩主細川韶邦の位は従四位上、世子の護久は従四位下で、知人への手紙に「臣下の自分が一躍従四位下を賜ることに当惑しています」と書いています。

ところで、小楠の京都での住居ですが、収入が増え、従者や来客が多くなる度に大きな家に転居し、12月には京都御所近くの寺町通りに移っています。小楠の病状は相変わらずでしたが、12月26日付の自宅への手紙(小楠最後の手紙になる)には「私は不思議に都にて年を迎え、若者上下22人相手に越年します。外出の時も大勢の供廻りで、俄か大名になったようで可笑しく思います」とあります。小楠は、このような状態で、明治2年の正月を京都で迎えたのでした。

*会津・桑名両藩…幕末当時の会津藩(現福島県)藩主は松平容保(親藩28万石・京都守護職)・桑名藩(現三重県)藩主は松平定敬(譜代11.3万石・京都所司代・容保は兄)。◎親藩…徳川將軍家分家の大名家。◎譜代大名…関ヶ原戦以前からの徳川家重臣が就いた大名家。

*戊辰戦争…明治元年(1868)1月の「鳥羽・伏見の戦」から上野戦争(彰義隊)・北越戦争・会津戦争を経て同2年5月の箱館戦争までの新政府軍と旧幕府軍との戦。1868年は六十干支(えと)の戊辰に当たる。

*凌雲丸…英国製の蒸気船(鉄製・160馬力・長さ180尺(約48.5m)・荷積高150トン)。

*世子…大名などの後継者。細川護久は兄の細川韶邦の世子。

*徴士参与…諸藩士から選ばれた有才の者が就任した明治新政府の官吏の職名。

*従四位下…官吏の序列を示す等級の一つ。諸臣の位階(位)は、一位~八位・初位からなり、一位~三位は正・従の各二階、四位~八位は正・従をさらに上・下に分けた。三位までを公卿、四位・五位を通貴(大夫)と称し、六位以下との差は大きかった。

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 — その業績と生涯 —



京都で始まった戊辰戦争の戦況は北海道箱館へ移り、京都市中は次第に平穏になってきました。そこで、大名のように多くの供廻りを好まぬ小楠は、役所への出退勤の護衛も人数を著しく減らし、門生も2人ずつの交替制にして離れて随伴するように指示しました。



▲小楠殉節地(京都市中京区寺町丸太町)

23 小楠 凶刃に斃れる

明治2年(1869)1月5日の午後、京都御所近くの寺町通丸太町で1発の銃声が鳴り響くのと同時に、覆面をした6人の刺客が、通りかかった横井小楠の駕籠に襲いかかりました。

小楠は、前日の年明けの初出勤と同様、当時は国の役所があった京都御所に朝から出仕し、退庁をしたのは午後2時過ぎでした。彼の駕籠は寺町御門より御所を出ましたが、ここから寺町通を南下すれば住居までの道のりは僅かでした。駕籠脇には京都で雇った越前生まれの若党2人(松村・上野)、駕籠から離れて従っていたのは当日の護衛番で門生2人(横山・下津)でした。前夜までに手筈を打ち合わせていた刺客(上田・土屋・前岡・中井・鹿島・柳田)たちは、御所近くの築地の陰で小楠の退出を窺っていました。駕籠が丸太町の角を通り過ぎた直後、上田が駕籠に向かって発砲し、それを合図に6人が駕籠を目掛けて斬り込んだのです。不意を食らって駕籠脇が乱れた瞬間、刺客の中井は右から、上田は左から、駆け寄りざまに一刀を駕籠に突っ込みました。異常な雲囲気を察した小楠は素早く駕籠から抜け出し、短刀を引き抜いて身構えると、駕籠の周囲は敵味方の白刃が閃き、たちまち乱戦の修羅場となりました。

駕籠脇に初めから居た松村は必死になって防ぎましたが、右腕を深く斬られ、上野は銃声を聞き一、二歩踏み出した途端、背後から一刀を横腹に受け、振り返るところをまた一太刀浴びてしまいました。離れて従っていた横山と下津も銃声に驚いて駕籠に向けて駆け出しましたが、複数の刺客が2人に斬りかかりました。下津はそのうちの1人の肩に深手を負わせましたが、門生の2人は小楠に近寄ることができません。このような中で小楠は、駕籠を後ろ楯に四方より

迫る敵を短刀1つで支えていましたが、病身の老体では思うに任せず、幾太刀も浴びたうえに横合いから斬り込んできた一撃に倒されてしまいました。

刺客の鹿島が小楠の首級をあげて丸太町を西に走ると、ほかの仲間もその後が続いたので、横山と下津はこれを追跡しました。この時、韋駄天のあだ名を持つ若党が急を聞いて現場に駆けつけ、刺客の後を追いかけて小楠の首を奪い取りました。その間に刺客は何処ともなく逃げ去りました。時に小楠は61歳でした。

事件後、直ちに京都の要路は封鎖され、犯人の探索が行われました。その結果、犯人は頑固な保守攘夷派の志士とわかりました。また、小楠暗殺の動機は、開国論者横井小楠が新政府で重要な役割を果たしていることへの反発、さらに「天主教*を国内に広げようとしている」ことでした。しかし、小楠は、「耶蘇教が国内に入れば、仏教と宗旨(主義・主張)争いが起り、乱を生じる」(『沼山対話』)ことを懸念しており、刺客たちは誤解に基づいた風説を真に受けたものと思われます。



▲小楠墓地(京都市左京区南禅寺)

小楠の遺骸(なきがら)は京都南禅寺天授庵に埋葬され、後に沼山津の小楠公園に遺髪が葬られました。小楠公園では毎年、1月5日を新暦に直した2月15日に小楠墓前祭を行っています。



▲小楠墓前祭(小楠公園)

*天主教…キリスト教の呼び方のひとつ。耶蘇教も同じ。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—

明治2年(1869)6月、諸藩主による版籍(土地・人民)奉還の後、政府は旧藩主を改めて知藩事(地方長官)に任命し、藩政を委任しました。肥後藩においても藩主細川韶邦が熊本藩知事に就きましたが、病気を理由に隠居したため、翌年5月、世子で弟の護久が家督を継ぎ、第2代熊本藩知事に任じられました。

24 肥後の藩政改革

明治3年(1870)6月、熊本藩知事細川護久※は、大参事長岡護美(護久の弟)と共に、藩政の大改革に着手しました。その内容は、権大参事米田虎之助(是容の子)をはじめ横井小楠門下の徳富一敬・竹崎律次郎・安場保和・山田武甫ら進歩的な実学党の人々を主要な役職に就かせ、実学的改革を行ったものです。なかでも熊本洋学校や古城医学校の新設は開明的なものであり、徳富一敬の起草といわれる藩知事の布告『村々小前共江』※(雑税の免除策)は当時としては画期的なものです。これらの改革は熊本藩としては最後の藩政改革になりましたが、新しい日本の政治・教育・医学などに大きな影響を与えました。

徳富蘆花は自著『竹崎順子』の中で、藩知事護久による実学党政権の誕生を次のように述べています。「肥後の維新は、明治3年に来ました。それは横井小楠がかねて囑望し遠ながら誘掖(導く)して置いた世子細川護久が家督を相続し、熊本藩知事となり、勅許(天皇の許し)を得て弟長岡護美と藩政改革に帰って来たのがきっかけでした。横井死後、満1年で横井の時代が肥後に来ました。横井の息のかかった若い藩主や其弟が局に立つと、横井の友人門人が網の元綱をしぼるやうに続々と登庸されます。」

同4年(1871)7月、政府は旧藩主の知藩事を免じて、東京居住を命じ、藩の廃止と県の設置を断行しました。いわゆる廃藩置県です。護久も藩知事を免ぜられて、以来、東京に居住しました。また、護美も大参事を免ぜられました。また、熊本藩の進歩的な実学党による政

権も、やがて明治政府と矛盾・対立するようになり、同6年(1873)、大久保利通の命を受けた安岡良亮が権令(地方長官)として白川県(のち熊本県)に派遣されると、藩政のポストを握っていた実学党の人たちは一掃されてしまいました。

※細川護久(1839~93)…近世細川家第14代。第12代肥後藩主細川斉護の子で、第13代藩主韶邦の弟。明治元年、鳥羽伏見の戦の折には御所を警護した。同2年、明治新政府の参与。同3年5月、熊本藩知事。同4年、細川家当主として華族(侯爵)となり、貴族院議員などを歴任した。

※村々小前共江…農民に対する雑税の廃止で、本税(米による年貢)のほかに課せられていた雑税(財政窮乏のための上納米・本年貢の付加税、地方政治の役所に当たる会所の維持費などで、本年貢のおよそ3分の1に相当)を廃止する政策。この政策を行った知事細川護久に対する感謝の石碑「知事塔」が各地(阿蘇市波野などに現存)につくられた。

平成21年5月号から書き始めた『横井小楠 —その業績と生涯—』は、今回で連載を終了します(全24回)。横井小楠は、この連載でもわかるように、幕末の動乱の時代に先を読む鋭い世界的視野をもっていた開明的思想家で、郷土熊本が誇る偉大な人物です。このシリーズでは業績の一部しか書き表すことができませんでしたが、横井小楠について、より深く理解するための一助になれば幸いです。

菅 秀隆(元横井小楠記念館長)



▲四時軒(手前)と横井小楠記念館(奥)